

# Kaori Nakano

3月の富山のトークショーでは多くの読者のみなさまとともに楽しい時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。ありがとうございます。お世話になったスタッフにも深く感謝申し上げます。

トークショーでは、社会情勢と直結した世界のファッション問題をいくつか話したのですが、そのなかのひとつに「文化の盗用」問題があります。日本ではあまり報じられませんが、海外では非常に神経質に取り扱われるテーマであり、オリンピック年に向けて世界との交流が活発になるといのに、知らないではすまされない話でもあるのです。

たとえば、アリアナ・グランデが1月中旬に発表した新曲「セブン・リングズ(七つの指輪)」を記念(?)して、「七輪」というタトゥーを入れたことが話題になりました。日本では「魚を焼くのか?」という揶揄の声が出た程度でしたが、アメリカでは、アリアナが漢字を使うことを「日本文化の盗用」だとして批判する声が大きかったです。批判の根拠が、日本とアメリカではまったく違っておりました。

昨年末には、ブラダが黒人のキヤラクターを用いたアクセサリーを発売したところ、「文化の盗

用」と非難され、同社は商品を手直しして撤回。続いて、グッチが、タートル部分を引き上げて口まで覆うと黒人の顔のように見えるセーターを発売しましたが、これもやはり「文化の盗用」と批判を浴びて撤回を余儀なくされました。両者とも、黒人文化を侮辱する意図などなかったにもかかわらず、いったんそのように解釈されてしまうと、ビジネスにも

## 中野香織 ファッション歳時記 91

### 「七輪」はなぜ 批判されたのか

ち黒人やアジア人が白人のまねをしても問題にはなりません。

日本では植民地支配が起きなかったために、このような差別の構造は他国に比べて目立ちにくく、「自分たちの文化が、支配者に盗用される」という感覚がピンとこないのは当然なのかもしれません。しかし、長きにわたって差別に苦しんできた人たちの感情に対する想像力は、常に頭の片隅に置いておかねばならないのだからなと思います。

ブランド価値にも甚大な被害を被ってしまうのが現代なのです。「文化の盗用」問題は、植民地支配の時代にまでさかのぼって考えなくてはならないことなのですが、「支配・差別してきた、優位に立つ人」(白人)が、「支配・差別されてきた人」(黒人、アジア人)の文化からヒントを得てなにかを表現したときに浮上します。逆のケースすなわ

それにしても、リスペクトする異文化からヒントを得たものまで「文化の盗用」として片っ端から血祭りにあげられる最近の傾向には、クリエイターでなくてももうんざりします。グッチは最新のコレクションで、モデルに仮面をかぶせました。もはや人種は不明だから「盗用」のケチはつけようがない。人種不明の世界には多様な文化への賛美がちりばめられ、自由で豊饒な創造の可能性が広がっていました。仮面が批判に対する防御装置になると同時に、表現の自由を獲得するための武装にもなっていたわけですね。セーター撤回を余儀なくされたグッチが、世間おしやれな一矢を報いたようにも見えました。

#### なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。株式会社Kaori Nakano代表取締役。服飾史家・エッセイストとして研究・講演・執筆をおこなうほか企業の顧問教授を務める。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書『紳士の名品50』(小学館)、『モードとエロスと資本』(集英社新書)ほか。「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史(仮)」が6月中旬、吉川弘文館より発売予定。

